

ハンガリー事件と日本

著：小島 亮 出版社：中公新書

垣見 光佑

ハンガリー事件



- I) 1956年10月下旬発生・11月下旬沈静化
- II) 反ソ暴動
- III) 首相ナジ、ソ連軍の軍事介入により鎮圧
- IV) 死傷者1万数千人・亡命者約20万人



スターリン批判

I) ソ連共産党第20回大会におけるスターリン批判

→スターリン体制守護を目的としたスターリン個人の批判

II) スターリン体制＝スターリン個人独裁体制

→戦時、準戦時体制下におけるプロレタリア党独裁の緊急避難形態

スターリン批判

Ⅲ) 結論：体制内再編を目指す一種の「予防革命」であり言葉の過激さに反比例し、本質は保守的なものであった



ゲレ演説

- I) 民衆を「挑戦者」と罵倒
- II) 民衆の政治要求を一顧だにせず強硬な内容
→民衆と治安当局の関係は悪化

日本における影響

- I) 保守・右翼・反共の立場からハンガリー警察への反対声明
- II) 日本ハンガリー救援会創立
- III) 新左翼の誕生

日本ハンガリー救援会

I) 1956年11月13日、社会党右派の西尾末広と自民党の芦田均らにより創立

II) 目的：ハンガリー難民の救済
→日本各地で募金活動、講演会活動を実施

III) 日本政府の政治的理由により沈静化

新左翼の誕生

- I) 元青年共産同盟の黒田寛一スターリン批判を受け「スターリン批判の基礎」を発表
- II) ソ連の軍事介入をソ連の都合に合わせた体制であるとして非難
- III) ハンガリー事件を革命と評す

左派政党による評価

I) 社会党右派：ソ連社会主義破綻の象徴

左派：反革命

II) 左派と右派の論争

→ハンガリーの自由化運動についてソ連の武力干渉を不許可

III) 社会党は左派が主流